

日本海スルメイカ漁場調査 — 抄録 —

鈴木 史紀・青山 宝蔵

発表誌名

イカ釣り漁場開発調査資料19号（平成6年5月）及び平成5年度外洋性イカ（スルメイカ・アカイカ）に関する生物測定・標識放流・海洋観測基礎資料集（平成6年5月） 青森県水産試験場

抄 録

日本海スルメイカ漁場調査

日本海沿岸海域調査

平成5年5月～10月に試験船「東奥丸」・「青鵬丸」で北緯39度～43度、東経138度以東の日本海沿岸域で漁場調査を実施した。

*青鵬丸の調査についてはマグロ延縄漁業開発試験事業（6月～10月）で行ったイカ釣り漁獲試験結果を資料として用いた。

1. 沿岸域におけるスルメイカの水揚げ動向

本県日本海側主要4港スルメイカの水揚げ量は5,042トンで昨年の108%であった。ここ10年間でみると'89年に次ぐ高い水準であった。

1日1隻当り漁獲量（C P U E）は557kgで昨年並であった。ここ10年間では最も高い水準であった。

1993年の初水揚げは小泊港で5月21日にみられ昨年並であった。

2. 沿岸域における漁場環境、分布、群の性状、移動

(イ) 漁 場 環 境

1993年の定線海洋観測結果から本県沿岸の対馬暖流域の勢力は、春季から初夏にかけては強勢、夏季には弱勢、9月・10月には強勢、11月には弱勢に経過した。

(ロ) スルメイカの分布密度（釣機1台1時間当り漁獲尾数）

調査期間中、本県沿岸域に來遊した魚群の來遊密度は比較的安定した。

(ハ) 群 の 性 状

調査期間中、本県沿岸域に來遊した群の性状を、外套長組成ならびに成熟・交接状況等からみると、同時期に発生した群が順次本県沿岸域に來遊したとみられるが、10月には一部小型イカの加入もみられたことから発生時期を異にした群の加入もみられた。

(ニ) 海岸域における群移動

調査期間中に標識放流した尾数は4,480尾。再捕尾数は80尾で、再捕率は1.8%であった。移動は従来のパターンと同様の傾向がみられた。

日本海沖合海域漁場調査

1993年5月～9月に試験船「東奥丸」で北緯36度～44度、東経132度以東の日本海沖合域で漁場調査を実施した。

1. 沖合域におけるスルメイカの水揚げ動向

本県での主たる水揚げ港である八戸・大畑港には27,488トンの水揚げがみられ（凍結品）、昨年の72%であった。（但し、道東海域での操業分の漁獲量一部含む）。これは、スルメイカ価格の低迷により、大半の凍結船はアカイ漁業に切り替えたためと考えられる。

2. 沖合域における分布

(イ) スルメイカの分布密度（釣機1台1時間当り漁獲尾数）

沿岸域と同様に来遊密度は比較安定していた。